

立命館大学大学院

2023年度実施 入学試験

博士課程前期課程

文学研究科

人文学専攻・日本史学専修

入試方式	実施月	コース	専門科目		外国語(英語)	
			ページ	備考	ページ	備考
一般入学試験	9月	研究一貫	P.1～		P.7～	
	2月		P.9～		P.15～	
	9月	高度探究	P.1～			
	2月		P.9～			
社会人入学試験	9月	研究一貫	P.1～			
	2月		P.9～			
	9月	高度探究				
	2月					
外国人留学生入学試験 (RJ方式)	9月	研究一貫	P.1～			
	2月		P.9～			
	9月	高度探究	P.1～			
	2月		P.9～			
学内進学入学試験	9月	研究一貫				
	2月					
	9月	高度探究				
	2月					
APU特別受入入学試験	9月	研究一貫				
	9月	高度探究				

【表紙の見方】

×・・・入学試験の実施がなかった等の理由で入学試験問題の作成がなかったもの、または、問題を公開しないもの
 斜線・・・学科試験(筆記試験)を実施しないもの

立命館大学大学院
2023年度実施 入学試験

博士課程後期課程

文学研究科

人文学専攻・日本史学専修

入試方式	実施月	外国語(英語)	
		ページ	備考
一般入学試験	2月	P.17～	
外国人留学生入学試験	9月		
	2月		
学内進学入学試験	2月		

【表紙の見方】

×・・・入学試験の実施がなかった等の理由で入学試験問題の作成がなかったもの、または、問題を公開しないもの
斜線・・・学科試験(筆記試験)を実施しないもの

※試験終了後、ホッチキスで綴じること(太線の4箇所)

2024年度 立命館大学大学院文学研究科入学試験問題

2023年9月9日

博士課程前期課程 人文学専攻
日本史学専修

「専門科目」

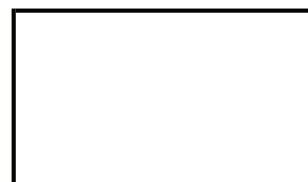
全 10 ページ

●受験上の注意

- ① 試験中、冊子をばらしても構わないが、終了後再び綴じて提出すること
(ホッチキスを貸与します)
- ② 全ての用紙に受験番号、氏名等を記入し、提出すること

●試験中の持込許可物件について

- ① 筆記用具、受験票、時計以外の持込は認めない



文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	コース	受験番号	氏 名
人文学 専攻 (日本史学専修)	前期課程	専門科目	<input type="checkbox"/> 研究一貫 <input type="checkbox"/> 高度探究		

問Ⅰ 次の四題から一つを選んで、論述せよ。

(Ⅰ) 行基について、政府の対応を軸にして論述せよ。

(Ⅱ) 鎌倉幕府の御家人制について、近年の研究動向を踏まえつつ論じなさい。

(Ⅲ) 近世の対外関係について、自由に論述せよ。

(Ⅳ) 日本近現代史上の転換期を一つ設定し、そのタイミングで何が転換したのか、そしてそれは何が理由だったのかを論ぜよ。

問Ⅱ 次の六つの語句から四つを選び、それぞれ三〜五行程度で説明せよ。

① 大津皇子

② 使節遣行

③ 足利義政

④ 堂島米市場

⑤ 中川小十郎

⑥ 農地改革

文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	コース	受験番号	氏 名
人文学 専攻 (日本史学専修)	前期課程	専門科目	<input type="checkbox"/> 研究一貫 <input type="checkbox"/> 高度探究		

問三 次の史料問題（一）～（四）の中から二つを選んで、解答せよ。

（一）次の史料を読み、以下の問いに答えよ。

①後太上天皇顧命皇太子曰予素不尚華飭况擾耗人物乎歛葬之具一切從薄朝例凶具固辞奉還葬畢釋練莫煩國人葬者藏也欲人不觀送葬之辰宜用夜漏追福之事同湏儉約又國忌者雖義在追遠而糾苦有司。又歲竟分綵帛、号曰荷前。論之幽明、有煩無益。並湏停狀、必達朝家。夫人子之道、遵教爲先。奉以行之、不得違失。重命曰、予聞、人歿精魂皈天。而空存冢墓、鬼物憑焉、終乃爲祟、長貽後累。今宜碎骨爲粉、散之山中。於是、②中納言藤原朝臣吉野奏言昔宇治稚彥皇子者我朝之賢明也此皇子遭教自使散骨後世效之然是親王之事而非帝王之迹我國自上古不起山陵所未聞也山陵猶宗廟也縱無宗廟者臣子何處仰於是更報命曰予氣力綿悛不能論決卿等奏聞嵯峨聖皇以鑒裁耳。

〔出典〕黒板勝美・国史大系編集会編『新訂増補国史大系（普及版） 続日本後紀Ⅱ

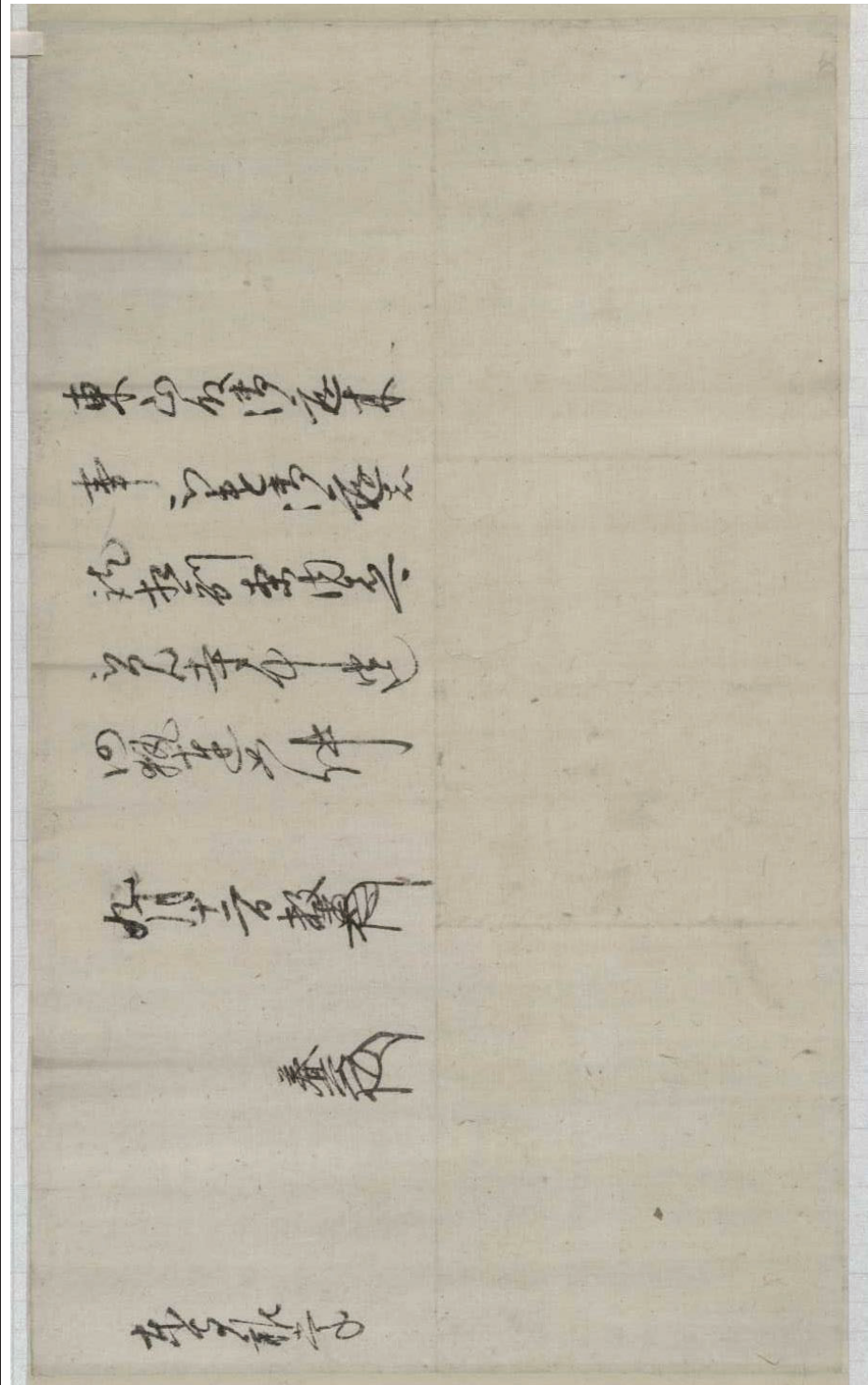
承和七年五月辛巳条、一〇二頁（吉川弘文館、一九七二年）

- （１）傍線部①を読み下しなさい。その際、旧字は新字（常用漢字）に直すこと。
- （２）波線部②の内容を説明しなさい。（逐語訳である必要はない）

文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	コース	受験番号	氏 名
人文学 専攻 (日本史学専修)	前期課程	専門科目	<input type="checkbox"/> 研究一貫 <input type="checkbox"/> 高度探究		

- (1) 次を示す図版（古文書）のコピーに関する設問（1）～（3）に答えよ。
- (1) この古文書の釈文を作れ。改行は原文通りに行い、返り点・読点を付け、異体字・正字（旧漢字）は対応する常用漢字（新字）があれば、その類に改めよ。
- (2) この古文書の読み下し文（書き下し文）を作れ。
- (3) この文書では、どのような立場の者が、誰に対して、何を命じているか。文書内容に即して具体的に説明せよ。
- 〔出典〕東寺百合文書WEB <https://hyakugo.pref.kyoto.lg.jp/contents/detail.php?id=22605>



文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	コース	受験番号	氏 名
人文学 専攻 (日本史学専修)	前期課程	専門科目	<input type="checkbox"/> 研究一貫 <input type="checkbox"/> 高度探究		

(三) 次の史料を読み、以下の問いに答えよ。

- 一、已下刻出御、前方ニ御進物ならべ置、勸修寺大納言（経広）御太刀目録持参、御前ニ置之披露、上野介御縁より罷出、御座敷鋪居之内萱畳目上之へり際ニて、御名代之御礼申上之退去、御移徙之御祝儀、御太刀目録飛鳥井大納言（雅章）持参、披露有之て（A）上野介右之所江罷出、御礼申上之、其以後自分之太刀目録持参、御敷居之内ニ置之、其身ハ御縁より御礼申上候、其以後天盃御銚子ニ戴、御酌控有之時、伝奏差図之刻罷出、天盃謹て頂戴之、御土器ヲ持退去、
- 一、（B）法皇御所江伺公、芝山中納言被出、御口上之趣申渡之、此時而伝奏・佐渡守列座、奉書者伝奏江相渡候、内一紙ニ候故伝奏被申上、

御口上

- （C）今度御讓位・御受禪珍重被思召候、為御祝儀以御使被仰上候付て、白銀・綿被進候、可然様ニ御披露可被致之由、御意ニ候、

〔出典〕『吉良家日記』寛文三年正月二十九日条

- (1) 傍線部（A）の人物は、この史料では將軍上使として参内しているが、その職務に関わつて、後に刃傷事件と仇討ちの当事者となる。それらの経緯について知るところを述べよ。
- (2) 傍線部（B）の人物は、この時に即位した靈元天皇までの四代にわたつて院政を行つた人物である。しかし、院政の開始時には幕府と相談をせず譲位したため、朝幕関係は冷え込んだ。なぜそのようなことになったのか、前提となる倡侶らの配流事件も含め、その経緯を述べよ。
- (3) 傍線部（C）を読み下し文（書き下し）にせよ。ただし、すべてひらがなにすること。

文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	コース	受験番号	氏 名
人文学 専攻 (日本史学専修)	前期課程	専門科目	<input type="checkbox"/> 研究一貫 <input type="checkbox"/> 高度探究		

(四) 次の史料を読み、全文をひらがなに直せ、また後の問い①～③に答えよ。

御分袂爾来益御清康奉賀上候。陳は今般^①鹿児島県下云々に付而は種々御配慮被下候
半と実に^②面目も無之仕合奉存候。就而は聊愚存も無之、^③当使少書記官折田平内外向
人明治丸より該県へ差立候間、何か用向も候は、御使役被下度候。尤同人は腹心之者に
付枢密之義御托し相成候共差支無之候者に候間、其段御承知被下度、右不取敢御通知旁
如此御座候。何れ御帰京之上に申残し候。拜手頓首。

二月十二日

黒田清隆

山県賢台
伊藤賢台
悟右

- ① 下線部①に関して、この時「鹿児島県下」で何が起きていたのか、知るところを述べよ。
- ② 下線部②に関して、黒田はなぜ「面目も無之」と述べているのか、考えられることを答
えよ。
- ③ 下線部③に関して、「当使」とは何のことか。

※試験終了後、ホッチキスで綴じること(太線の4箇所)

2024年度 立命館大学大学院文学研究科入学試験問題

2023年9月9日

博士課程前期課程 人文学専攻
日本史学専修

「外国語」(英語)

全 3 ページ

●受験上の注意

- ① 試験中、冊子をばらしても構わないが、終了後再び綴じて提出すること
(ホッチキスを貸与します)
- ② 全ての用紙に受験番号、氏名等を記入し、提出すること

●試験中の持込許可物件について

- ① 筆記用具、受験票、時計以外の持込は認めない



文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	コース	受験番号	氏 名
人文学専攻 (日本史学専修)	前期課程	外国語 (英語)	<input type="checkbox"/> 研究一貫 <input type="checkbox"/> 高度探究		

問題 以下の英文を読み、和訳せよ。

It was under the inspiration of Mannheim that I attempted in Part I of this book—albeit with indifferent success—to treat early Tokugawa Neo-Confucianism not as the doctrines of individual Confucianists, but rather, on an impersonal level, as a “Neo-Confucian mode of thought” and to try to trace through the historical vicissitudes of that mode of thought the disintegration of the “orthodox” world view of the Tokugawa period. The idea was attractive enough in its conception, but the actual labor of trying to bridge the gap between Mannheim’s abstract methodology and the embarrassingly rich historical material on Tokugawa Confucianism and National Learning was far from easy.

I have already mentioned that I also found Borkenau’s work an illuminating illustration of how to go about linking the internal logical and the external sociological perspectives on the history of ideas. The argument of Part I—that the twin related concepts of “norm” and “nature” that characterized Neo-Confucianism split apart later in the development of Confucian thought and that it was this split which prepared the ground for the mode of thought of the scholars of the National Learning—got many hints from Borkenau’s description of the historical development of Thomas Aquinas’ concept of “natural law” and its various categories.

Masao Maruyama: *STUDIES IN THE INTELLECTUAL HISTORY OF TOKUGAWA JAPAN*. UNIVERSITY OF TOKYO PRESS, 2001, p.xxviii

※試験終了後、ホッチキスで綴じること(太線の4箇所)

2024年度 立命館大学大学院文学研究科入学試験問題

2024年2月11日

博士課程前期課程 人文学専攻
日本史学専修

「専門科目」

全 10 ページ

●受験上の注意

- ① 試験中、冊子をばらしても構わないが、終了後再び綴じて提出すること
(ホッチキスを貸与します)
- ② 全ての用紙に受験番号、氏名等を記入し、提出すること

●試験中の持込許可物件について

- ① 筆記用具、受験票、時計以外の持込は認めない



文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	コース	受験番号	氏 名
人文学 専攻 (日本史学専修)	前期課程	専門科目	<input type="checkbox"/> 研究一貫 <input type="checkbox"/> 高度探究		

問一 次の五題から一つを選んで、論述せよ。

- (一) 承和の遣唐使発遣以降の対外交流について論述せよ。
- (二) 鎌倉時代における陸上交通の特徴について論述せよ。
- (三) 明清交替が日本社会に及ぼした影響について論述せよ。
- (四) 日本の近代化・西欧化について、ある事象や視点を一つ取り上げ、それに基づいて論ぜよ。
- (五) 一九二〇年代の近代日本の特質について、重要と考えるところをのべよ。

問二 次の六つの語句から四つを選び、それぞれ三〜五行程度で説明せよ。

- ① 倭の五王
- ② 大番役
- ③ 曾我物語
- ④ 京都御役所向大概覚書
- ⑤ 片務的最恵国待遇
- ⑥ 玉音放送

文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	コース	受験番号	氏 名
人文学 専攻 (日本史学専修)	前期課程	専門科目	<input type="checkbox"/> 研究一貫 <input type="checkbox"/> 高度探究		

問三 次の史料問題（一）～（四）から二つを選んで、解答せよ。

（一）次の史料を読み、以下の問いに答えよ。

詔馬牛代人勤勞養人曰茲先有明制不許屠煞今聞國郡未能禁止百姓猶有屠煞亘有犯者不問蔭贖先決杖一百然後科罪又聞國郡司尋非緣公事聚人田獵妨民產業損害實多自今以後亘令禁斷更有犯者必擬重科。

天平十三年二月七日

〔出典〕黒板勝美・国史大系編集会編『新訂増補国史大系〈普及版〉 類聚三代格』

五九九頁（吉川弘文館、一九七二年）

（１）全文を読み下しなさい。その際、旧字は新字（常用漢字）に直し、句読点をつけること。

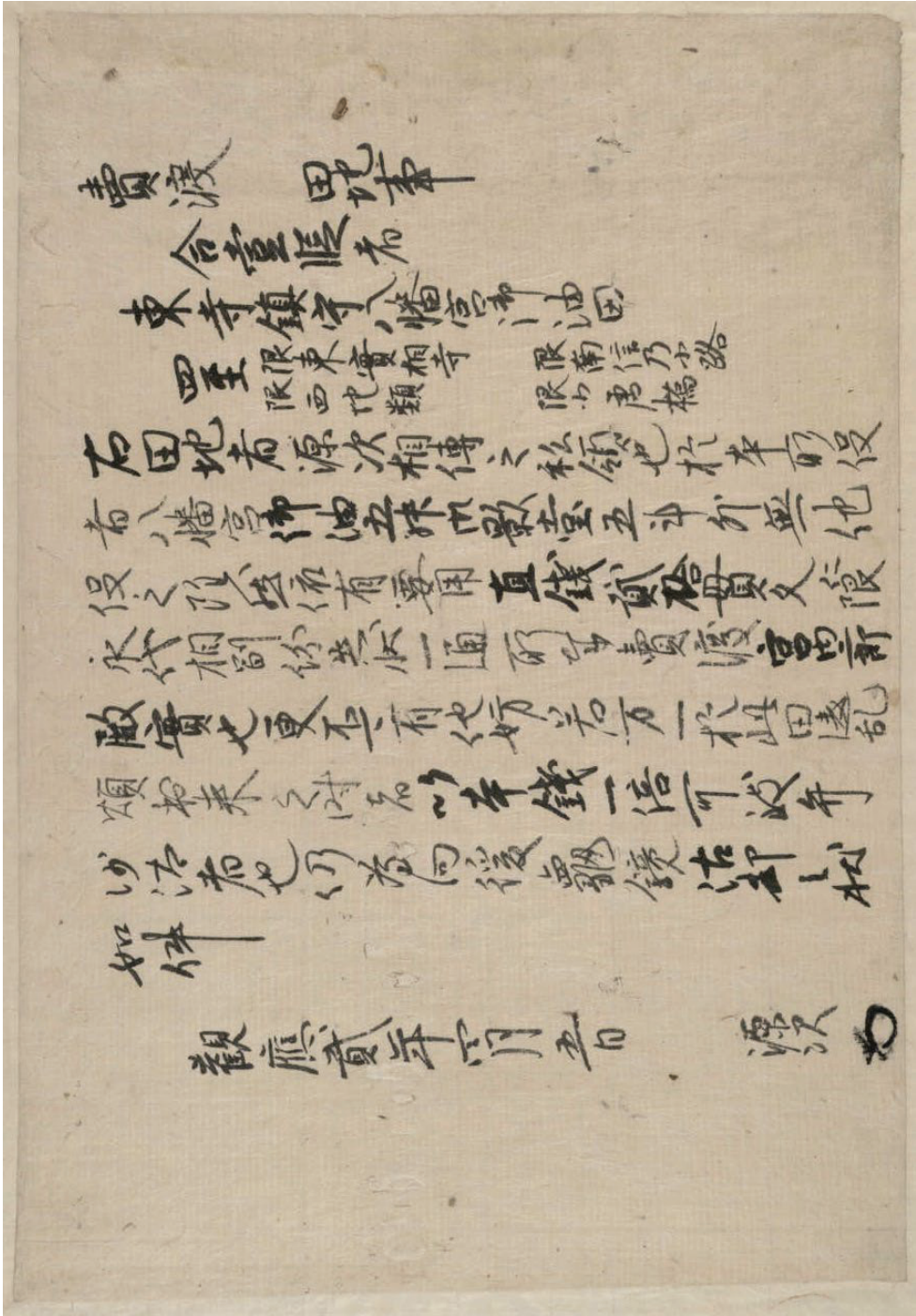
（２）全文を現代語訳しなさい。

文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	コース	受験番号	氏 名
人文学 専攻 (日本史学専修)	前期課程	専門科目	<input type="checkbox"/> 研究一貫 <input type="checkbox"/> 高度探究		

- (1) 次を示す古文書写真に関する設問 (1) ～ (3) に答えよ。
- (1) この古文書の釈文を作れ。改行は原文通りに行い、返り点・読点を付け、異体字・正字（旧漢字）は対応する常用漢字（新字）があれば、その類に改めよ。
- (2) この古文書の読み下し文（書き下し文）を作れ。
- (3) この古文書における売買内容をわかりやすく説明せよ。

〔出典〕 東寺百合文書 WEB <https://hyakugo.pref.kyoto.lg.jp/contents/detail.php?id=14404>



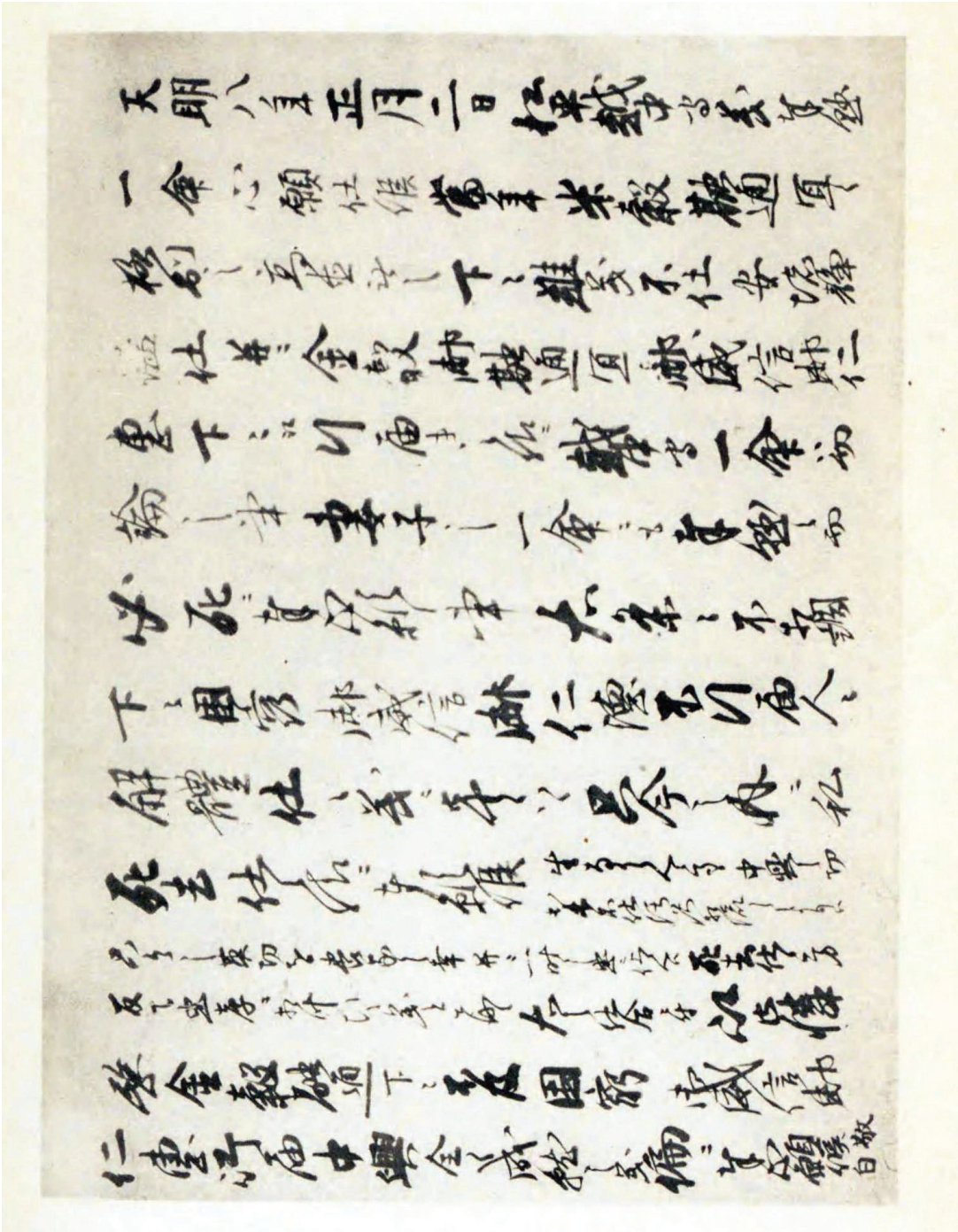
文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	コース	受験番号	氏 名
人文学 専攻 (日本史学専修)	前期課程	専門科目	<input type="checkbox"/> 研究一貫 <input type="checkbox"/> 高度探究		

- (三) 次を示す古文書写真に関する設問 (1) ～ (3) に答えよ。
- (1) この古文書の釈文を作れ。改行は原文通りに行い、返り点・読点を付け、異体字・正字（旧漢字）は対応する常用漢字（新字）があれば、その類に改めよ。
- (2) この古文書に、文書名をつけよ。
- (3) この古文書からうかがえる内容について、その歴史的意義を論ぜよ。

〔出典〕 淡沢栄一『梁翁公伝』岩波書店

国立国会図書館デジタルコレクション > <https://dl.ndl.go.jp/pid/1875017/1/103>



文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	コース	受験番号	氏 名
人文学 専攻 (日本史学専修)	前期課程	専門科目	<input type="checkbox"/> 研究一貫 <input type="checkbox"/> 高度探究		

(四) 次の史料を読み、全文をひらがなに直せ。また後の問 (1) ～ (3) に答えよ。

後藤・板垣兩人洋行の件に付内情左に御報申上候。後藤は今度洋行の主意は実は洗濯積りに而、帰朝の上は官途に就かんとの下心に有之候。勿論其心を入替へ事を共にすくき者に相成候は、再び官途に就けるも別に不都合無之事と奉存候。乍去同人は随分策略家なれば真の底意は難測候。申上候迄も無之事に候得共御油断は被成間敷候。

又板垣は洋行の目的は一は実地を見聞し智識を求むるに在れとも、一には又現今伊藤^①が憲法取調の爲め独逸に在れば其地に就て能く其穴を探り置、他日伊藤の論を撃破するの用意をなすに在る旨自由党员に対し言明せり。同人に対しても御油断は無之事と奉存候得共諸事御戒意相成度候。

(後略)

- (1) この書簡が書かれたのは明治何年の事か。その理由も答えよ。
- (2) 傍線部①について知るところを述べよ。
- (3) この書簡は井上馨から伊藤博文に宛てられたものである。井上は伊藤に何を伝えたかったのか。簡単にまとめよ。

※試験終了後、ホッチキスで綴じること(太線の4箇所)

2024年度 立命館大学大学院文学研究科入学試験問題

2024年2月11日

博士課程前期課程 人文学専攻
日本史学専修

「外国語」(英語)

全 3 ページ

●受験上の注意

- ① 試験中、冊子をばらしても構わないが、終了後再び綴じて提出すること
(ホッチキスを貸与します)
- ② 全ての用紙に受験番号、氏名等を記入し、提出すること

●試験中の持込許可物件について

- ① 筆記用具、受験票、時計以外の持込は認めない



文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	コース	受験番号	氏 名
人文学 専攻 (日本史学専修)	前期課程	外国語 (英語)	<input type="checkbox"/> 研究一貫		

次の英文を和訳しなさい。

Change came more slowly to the Japanese countryside, but the interwar years nevertheless saw impressive changes in rural society. The basic causes were the same: people were tired of being told their sacrifices were for the sake of the country, they were tired of seeing those more privileged than themselves gain at their expense, and they were sufficiently educated and literate to realize that other people, in other areas, were demanding more justice. In addition, their rent—a share of the crop—might be sold at great profit by their landlord.

Japan was still overwhelmingly rural after the Russo-Japanese War; rapid as urban growth had been, the vast majority of Japanese lived in hamlets and villages. There was widespread agreement that the spiritual and social health of the country depended upon the stability of the countryside. Agriculture was ultimately the basis, and this view, codified as *nōhon shugi*, “agriculture as the basis,” harked back to physiocratic Confucian thought. Some antimodernists deplored the fact that Japan was forsaking its roots for the false glitter of the West, but everybody thought of a healthy countryside as the real bulwark against the corrupting influences of the city.

Unfortunately that countryside was far from healthy, and most of its inhabitants had shared poorly in the benefits of modernity. By the years after World War I about 40 percent of all agricultural land was tenant farmed. This percentage fluctuated over time, but it remained relatively stable until the reforms that followed World War II. Rent averaged about 50 percent of the yield and was paid in kind; the tenant was obliged to carry it to the landlord's storage granary. Tenants were also expected to be of service to the landlord in a variety of ways when help was needed. The relationship was supposedly paternal, expressed in the landlord's status of *oyakata* (parent), a term encountered earlier with reference to labor contractors, but it could often signify submission rather than affection. The tenant had no security of tenure, and he risked his landlord's displeasure at his peril.

※試験終了後、ホッチキスで綴じること(太線の4箇所)

2024年度 立命館大学大学院文学研究科入学試験問題

2024年2月11日

博士課程後期課程 人文学専攻
日本史学専修

「外国語」(英語)

全 3 ページ

●受験上の注意

- ① 試験中、冊子をばらしても構わないが、終了後再び綴じて提出すること
(ホッチキスを貸与します)
- ② 全ての用紙に受験番号、氏名等を記入し、提出すること

●試験中の持込許可物件について

- ① 筆記用具、受験票、時計以外の持込は認めない



文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	受験番号	氏 名
人文学 専攻 (日本史学専修)	後期課程	外国語 (英語)		

次の英文を和訳しなさい。

The years between the wars exhibited a remarkable pluralism in politics and thought. The rapid course of industrialization, spurred by the Russo-Japanese War and climaxing during the years of World War I, brought to focus changes initiated by the Meiji reforms. Those changes had as their goal the creation of a Japan able to hold its own with the Great Powers and a Japan dominant in Northeast Asia. The forces they unleashed, however, brought dislocation in every part of Japanese society. Women began to tire of the “good wife, wise mother” role to which they had been assigned. A labor movement began to challenge the undisputed dominance of the members of the Industrial Club, and a tenant movement gave evidence of dislocations in village life. The diffusion of education brought with it ready access to outside thought, and modern transportation brought premodern Japan to the new industrial centers and cities. Urbanization brought with it a new mass culture. Japan had become a land of far greater social variety than before. It was more open to the world than it had been. The products and tensions of the modern world had rendered it more internationalist and cosmopolitan. But because more and more of Western literature and thought was available in translation, and Japan’s academic and cultural institutions had developed their own structure and mechanisms, Japan’s intellectuals were in some ways more parochial than their Meiji predecessors, who had had to meet the West on its own terms and not in Japanese translation.

Japan’s picture of the world, so clear and graded in Meiji times, also became less distinct and more complex. Japan was now one of the Great Powers, but the clarity of the model it had held up for emulation gave way to a multiplicity of images. The imperialist goal that had energized developed states in the nineteenth century gave way to talk of self-determination and cooperation. In China, in Russia, in Austria-Hungary, in Germany, and in Turkey monarchy was replaced by republicanism, and Japan—the struggling youth of the imagery of the 1880s—found itself an uncertain and rather fearful senior.

Used with permission of Harvard University Press, from *The making of modern Japan*, by Marius B. Jansen, 2000; permission conveyed through Copyright Clearance Center, Inc.